

# 14. 繰り返さないために

これまでみてきたように、感染症をめぐるっては、多くの差別や人権侵害が繰り返されてきました。

行政や医学界、報道機関も含め、私たち一人ひとりが差別に加担していなかったかについて振り返る必要があります。

ここで私たちは、感染症による差別を受けた人の声を謙虚に受けとめることが必要です。

## ▶ ハンセン病回復者の声

病気と発症者に対する誤解や偏見、差別が厳しい中、私が病気を発症したことを知った村の人たちがいたこともあり、差別や偏見の影響を受け、家族は村に住むことができなくなり実家をなくし、違うところに住むことになりました。ある日、母親が面会に来た時、涙しながら「あの家はもうない」と教えられ、しばらくして帰郷した際、実家のあった場所を見に行くと雑草しか生えていなかった光景を見て涙ぐんだことを覚えています。

家に帰ることをあきらめ、療養所で生活することを決めました。当時は、ハンセン病は嫌がられた病気ですが、今では菌さえ見つからない状況なのに、過去からのイメージが消えていません。病気のことを知り、差別や偏見がなくなってほしいと思います。

(1947年 13歳で三重県から岡山県の国立療養所へ)

12歳で親に療養所へ連れてこられました。家族は私の病気を隠しており、きょうだい間だけの秘密にしていました。今ではきょうだいはどうしているのか全く分からない状況です。それは仕方ないことだと思っています。私一人だけが騒いだところでどうしようもなく、きょうだいの好きのようにすればいいと思っています。

入所後の2回の病気の発症で、私の社会復帰の夢は潰えました。差別や偏見を生んだこの社会は憎たらしいですが、仕方ないとも思っていて、亡くなるのを待つだけです。今のままでは、差別はなくならず続いていくと思います。よほど意識していないと分からないうちに差別をしてしまうからです。正しいことをきちんと知って偏見で見ないようにしてほしいと思います。

(1948年 12歳で三重県から岡山県の国立療養所へ)